

# 東国十八賢について

山田 恭子

## 1. はじめに

中国の孔子廟には、孔子の他に、四大聖賢すなわち曾子 孟子、顔子、子思（孔子の孫）の四配像、また四科十哲すなわち德行、言語、政事、文学に優れた弟子達の孔門十哲が共に祀られてきた。<sup>1</sup> 古来より『孟子』公孫丑上には「七十子」として孔子門人の賢人が七十余人いたとされ、『史記』孔子世家には「身の六芸に通じる者、七十有二人」、『史記』仲尼弟子列伝には「子曰く、業を受けて身の通ずる者は七十有七人、皆な異能の士なり」などの記事もあり、古くから孔子とその弟子達が共に祀られてきた。そして、これを文廟配享ともいう。

このような文廟配享の影響は日本、朝鮮、越南など、周辺国にも及んだ。だが、それら周辺国では自国の儒者を共に祀ることはなかった。ゆえに朝鮮において、中国の聖賢のみならず、「東国十八賢」と称される自国の儒者までもが共に祀られた点は、儒教国家である朝鮮の他国とは異なる特徴であり、これら朝鮮の賢人こそがその国の文化、根底思想に大きな影響を与えたといえよう。

これまで「東国十八賢」について日本語で言及した論文としては、寺田剛の「韓国の孔子廟について」<sup>2</sup>がある。しかし内容は、朝鮮における祭祀を中心テーマとして『成均館略史』<sup>3</sup>にある「東国十八賢」を参考に、その略伝を紹介したに過ぎない。そこで本稿では「東国十八賢」に関連する資料をいくらか補い、十八人について表にまとめ、その特徴について言及したい。

## 2. 「東国十八賢」関連資料と文廟配享

「東国十八賢」とは新羅時代から朝鮮時代にかけての賢儒十八名の総称である。現存する「東国十八賢」についての原文資料としては次のものがある。

金性漑『東国文献』巻四「文廟配享篇」（木版本、一八〇四）<sup>4</sup>

姜敷錫『典故大方』巻四「文廟配享録」（漢陽書院、一九二四）<sup>5</sup>

小田省吾・魚允迪合著『朝鮮文廟及陞廡儒賢：附朝鮮儒学年表、朝鮮儒学淵源譜』（朝鮮史学会、一九二四）<sup>6</sup>

李会淦『道学淵源録』（木活字本、一九三四）<sup>7</sup>

成均館編『成均館略史』（成均館、一九七二、一九八二年別編）

安寅植 懸吐『東国文廟十八賢年譜』（韓国名賢遺蹟研究所、一九六六）

「東国十八賢」という名称の由来については詳らかではない。『東国文献』や『典故大方』には「文廟配享録」として、十八賢が収録されている。従って「東国十八賢」として称されるようになったのは近代、少なくとも一九三〇年代以降ではないかと考えられる。というのも、一九三四年に刊行された『道学淵源録』に「東国十八賢」という題目が見られるからである。<sup>8</sup>

「東国十八賢」は、朝鮮における儒教受容を考える上で重要である。朝鮮では新羅聖徳王十六年（717）に初めて孔子が祀られたと伝わり、高麗の仁宗五年（1126）には各地方に儒教教育機関であり文廟を祀る郷校が設立されたとされる。これは新羅元聖王四年（788）に科挙制度の前身である読書三品科や高麗光宗九年（958）に本格的な科挙制度がはじまったことと軌を一にするものだといえる。さらに注目すべきは高麗の顕宗十一年（1022）に、孔子と共に自国の賢人が祀られたことにある。このことは中国を除いて儒教が伝わった他国には見られない現象であり、それだけ朝鮮半島に於いての儒教は自国化されたものであったといってもよい。以下、東国十八賢の一覧を記す。

順番	名前	諡号	生没年	時代	配享（王代）	西暦	関連書院 創建年
1	薛聡	弘儒侯	650頃～740頃	新羅	顕宗13年	1022	西嶽書院 1561
2	崔致遠	文昌侯	857～？	新羅	顕宗11年	1020	武城書院 1484
3	安珣	晦軒	1243～1306	高麗	忠肅王6年	1319	紹修書院 1543
4	鄭夢周	圃隱	1337～1392	高麗	中宗12年	1517	崇陽書院 1573
5	金宏弼	寒暄堂	1454～1504	朝鮮	光海君2年	1610	道東書院 1568
6	鄭汝昌	一斗	1450～1504	朝鮮	光海君2年	1610	藍溪書院 1552
7	趙光祖	静庵	1482～1519	朝鮮	光海君2年	1610	深谷書院 1650
8	李彦迪	晦齋	1491～1553	朝鮮	光海君2年	1610	玉山書院 1573
9	李滉	退溪	1501～1570	朝鮮	光海君2年	1610	陶山書院 1574
10	金麟厚	河西	1510～1560	朝鮮	正祖20年	1796	筆巖書院 1590
11	李珣	栗谷	1536～1570	朝鮮	肅宗8年	1682	文会書院 1568
12	成渾	牛溪	1535～1598	朝鮮	肅宗8年	1682	坡山書院 1568
13	金長生	沙溪	1548～1631	朝鮮	肅宗43年	1717	遯巖書院 1634

14	趙憲	重峯	1544～1592	朝鮮	高宗 20 年	1883	牛渚書院 1648
15	金集	慎独齋	1574～1656	朝鮮	高宗 20 年	1883	遯巖書院 1634
16	宋時烈	尤庵	1607～1689	朝鮮	英祖 32 年	1756	遯巖書院 1634
17	宋浚吉	同春堂	1606～1672	朝鮮	英祖 32 年	1756	遯巖書院 1634
18	朴世采	玄石	1631～1695	朝鮮	英祖 40 年	1764	鳳陽書院 1695

高麗時代に成均館の前身である国子監に、崔致遠と薛聡が祀られたのが東国十八賢の最初である。その後、安珦が文廟の荒廃を嘆き文廟の正殿である大成殿を建て、安珦自身も一三一九年に祀られている。『典故大方』によると、朝鮮時代に至り、文廟は「京城東部崇教坊」すなわち現在の成均館にある大成殿に設置され、太宗七年（1407）と宣祖三四年（1601）の二回再建されたことが記されている。また文廟には孔子、四聖、孔門十哲、宋朝六賢などの他、東廡には東国十八賢のうち奇数の九位、西廡には偶数九位の、総計百十二位の位牌が祀られている。

### 3. 東国十八賢の特徴

ここでは東国十八賢の略歴を考察し、その特徴について述べたい。<sup>9</sup>

先ほどの表からもわかるように、配享年代で言うならば、光海君二年に最も多くの人物が祀られている。これは朝鮮の役によって文廟をはじめとする多くの建物を焼失して荒んだ国を立て直すのに、儒教の力がいかに大きかったかを物語っている。また高麗末期に朝鮮太祖となった李成桂と対立した鄭夢周が十八賢に選ばれていることから、単に儒学で優れた業績を残しただけではなく、時の王朝に忠誠を尽くした人物であったか、ということも文廟に祀られる基準だったと考えられる。

これらの十八賢の中で最初に配享されたのが崔致遠である。崔致遠は長らく唐に留学し、外国人のための科挙である賓貢科に及第、文章家としても名を挙げた人物であるため、最も早くに祀られたといえる。同時期に祀られた薛聡は、新羅の高僧でありながら才能を王に惜しまれ王女の婿、すなわち附馬となった元暁大師の子である。父は高僧であったが、儒学を国学とすべく力を尽くした人物として名高い。高麗時代の安珦は元に赴き人質となった王子を守る一方で、朱子学を本格的に学び、『朱子家礼』などを輸入、高麗に儒教教育機関である成均館の前身の国学監を導入した人物である。鄭夢周も高麗時代末期に『朱子家礼』を学び本格的に家廟制度を導入、この頃から様々な祠廟が出来たとされる。また彼は高麗王朝に最後まで忠誠を誓った高潔な人物である。まずは1から9までの前半の略歴をみてみよう。

### 1. 薛聡（650頃～740頃）

号は水月堂。新羅の景德王とき活動していた儒学者で、新羅の高僧元暁大師と武烈王の王女との間の子である。強首、崔致遠などと共に新羅の三大文章家に挙げられる。最初は仏教に入門したが、後には、儒学に専念し、統一新羅以降は貴族の子弟に教えながら国学をうち立て儒教の発展を図った。著書に『花王戒』が伝わる。儒学の精神に立脚した道徳政治の実現を追求した政治家として、また儒教の普及に貢献した学者として、新羅時代の儒教の発展に大きな貢献をした薛聡は、顯宗十三年（1022）に弘儒侯の諡号を受け文廟配享された。

### 2. 崔致遠（857～？）

字は孤雲、慶州崔氏の始祖でもある。十二歳の年齢で唐に留学して賓貢科に及第した彼は、新羅時代を代表する儒者の一人である。文章にも優れており、唐で黄巢の乱が起きた時、これらの討伐を励ますために送られた「討黄巢檄文」は中国でも広く知られている。顯宗十一年（1020）に文廟配享され、朝鮮時代以降に文昌侯の諡号を受けた。『孤雲集』『桂苑筆耕』などの著書が伝わる。

### 3. 安珣（1243～1306）

号は晦軒、高麗末に活動していた儒学者で、宋代の朱子学を高麗に初めてもたらした。彼は特に朱子学の中でも、日常生活での実践道徳と関連した内容を強調し、孔子の学問は朱子の学問を介してのみ可能であるとした。死後の高麗忠肅王の命によって肖像画が描かれたが、この肖像画は、現在の慶尚北道にある紹修書院に保管されており、現存する最古のものの一つとして知られている。忠烈王三十二年（1306）に文成公という諡号が下され、朝鮮に性理学を最初に紹介した功績によって忠肅王六年（1319）に文廟配享された。

### 4. 鄭夢周（1337～1392）

高麗恭讓王代の儒学者で号は圃隱。牧隱李穡、冶隱吉再らとともに高麗儒教を代表する三隱と称される。一三九八年、李成桂と恭讓王を擁立し、日増しに衰退していく高麗の国運を正そうとしたが、国の将来の立場の違いにより、互いに対立するようになり、最終的には、開城の善竹橋にて反対派に殺されることになる。彼はすでに国立大学の性格を持っていた成均館のほかに、開城に五部学堂を設立して教育の機会を拡大し、地方にも郷校を立て、儒教の振興に力を注いだ。高麗の最後の忠臣として士の節を守り抜き、高麗と運命を共にすることで、後世の手本となった。朝鮮太宗元年（1401）に文忠公という諡号が下賜され、中宗十二年（1517）に文廟配享された。

## 5. 金宏弼 (1454 ~ 1504)

朝鮮成宗、燕山君代に活動していた儒学者で、号は寒暄堂である。佔畢齋金宗直の弟子として儒教の生活化に多くの関心と努力を傾けた。戊午士禍<sup>10</sup>の折に、金宗直の弟子という理由で、流刑になったが、一五〇四年の甲子士禍<sup>11</sup>の時、奸臣の策略によって死刑となった。金宏弼は『小学』<sup>12</sup>にある生活規範を一つ一つ実践することに努めた。宣祖七年(1574)に文景公の諡号を受け、光海君二年(1610)に儒教の生活化、実践化に尽力した功績によって文廟配享された。

## 6. 鄭汝昌 (1450 ~ 1504)

朝鮮燕山君代に活動した儒学者で、号は一蠹である。若い頃より儒学に没頭し、四一歳になってから、科擧に及第して官職についた。しかし、戊午士禍により奸臣たちの濡れ衣を着せられたまま極刑に処せられた。不幸な一生であったが、学問的には鄭夢周、金宗直に繋がる儒教の系統を継承した性理学の大家であり、学問の目的を聖人になることとした正統派儒学者であった。宣祖八年(1575)になって文献公の諡号が下賜され、光海君二年(1610)に儒教教育への貢献を認められ、文廟配享された。

## 7. 趙光祖 (1482 ~ 1519)

号は静庵、朝鮮中宗代の儒学者で当時の進取的な政治家でもあった。科擧及第後、多くの官職を歴任し、国家発展のために斬新な人材の登用が不可欠であると主張し、賢良科を設けて、儒教の至治主義、すなわち徳性と人性修養の儒教精神が政治家の徳目でなければならないという思想に基づく改革政治を主張した。特に、彼は不当な特権を享受している旧貴族層である勲旧派の力を抑え、腐敗した官吏を退けるなどの大胆な改革を主張した。しかし、儒教理念に基づいた改革政治は、勲旧派の姦計によって志を成し遂げられず、完成を待たずして、刑に処せられ死ぬことになった。宣祖十四年(1586)に文貞公という諡号を受け、光海君二年(1610)に師匠金宏弼とともに、文廟配享された。

## 8. 李彦迪 (1491 ~ 1553)

号は晦齋で、朝鮮中宗代に活動した性理学者。二四歳で官職に就いた後、国事に力を注いだ。当時、不当な権勢を享受していた金安老に批判的な立場を取った理由で、一五三一年に職を剥奪され帰郷し、儒教の学問発展に専念した。彼は儒教の民本思想に基づいて道徳政治の具現を主張し、金安老の死後には、吏曹判書と漢城府判尹などを歴任した。その後、濡れ衣を着せられて帰郷し、悲劇的な生を終えたが、当時、多岐に分かれて発展してきた性理学を一つに統合する礎を築いた功績によって宣祖三八年(1605)に文元



公という諡号を受け、光海君二年（1610）に文廟配享された。

#### 9. 李滉（1501～1570）

号は退溪、中宗代に活動した儒学者。儒教の発展を大義とし、官職を捨てて帰郷、儒教の經典に関する著述活動と弟子の教育に力を注いだ。朝鮮儒教を代表する学者として、また高邁な人格者として知られ、六十歳になった折、陶山書院を設立し後進の育成に力を注ぎ、柳成龍をはじめ数々の大儒学者を輩出した。彼は儒教の実生活と関連し、倫理道徳を朝鮮の土壤に移植させるのに大きな寄与をした。その功績で宣祖九年（1576）に文純公という諡号を受け、光海君二年（1610）に文廟配享された。

以上、前半部の略歴をみた。

10 以下の後半部の特徴をいうならば、金宏弼の門下であり『小学』を重んじ道学の実践に励んだ人物、そして李珥をはじめとする畿湖学派<sup>13</sup>の門下の人物の文廟配享である。これらの人々は新興士大夫を支持しながら旧貴族層に対しても穏健な立場をとったいわゆる西人といわれる人々である。そしてこれらの人物を中心に後に朝鮮独特の「礼学」の発展へとつながっていくのである。では、それらを見ていこう。

#### 10. 金麟厚（1510～1560）

号は河西で、成均館に入学して李滉らと共に学び、当時の儒学者たちと深い交流を持った。彼は中庸思想を基本にして、儒教の基本原則を教えるのに多くの貢献をしており、人間の純粋な本来の姿である「本然之性」を維持するために努力しなければならないと主張した。李滉らと共に朝鮮における朱子学理念を確立した数多くの功績を認められ、顕宗十年（1669）に文正公の諡号を受け、正祖二十年（1796）に文廟配享された。

#### 11. 李珥（1536～1584）

明宗・宣祖代の儒者で、号は栗谷である。幼い頃から神童として誉れ高く、科擧に九回壯元、朝鮮王朝史上、空前絶後の記録を残した。良妻賢母であり画家でもあった慈母、申師任堂の没後は、さらに儒教学問に没頭し、朝鮮儒教の発展に大きな貢献をした。彼は現実と理想を調和し実行しなければならないという主張の下、朝鮮の役に備えて、十万兵力を養うことを主張した。李滉と共に朝鮮時代の双璧をなす偉大な儒教学者である。仁祖二年（1624）に文成公という諡号が下賜され肅宗八年（1682）に文廟配享された。

## 12. 成渾（1535～1598）

宣祖時の性理学者で、号は牛溪。当時の著名な学者たちと交流し、高い儒教的な知識を築き、不惑でようやく官職に就き、吏曹参判などを歴任した。朝鮮の役の時、世子だった光海君を守りながら避難し、日本と和議することを進めたが、宣祖の怒りを買って官職を剥奪された。特に儒教学者として、道徳的行為とその根拠である「四端七情」について、李珣と論争をしたことで知られている。仁祖十一年（1633）に文康公という諡号が下賜され、肅宗八年（1682）に文廟配享された。

## 13. 金長生（1548～1631）

号は沙溪。栗谷から教えを受け、当時の儒教の発展のために大きな貢献をした。特に礼学に造詣が深く、国家儀典や主要行事があるたびに助言を求められた。彼は当時、困難な乱世を克服し、儒教的秩序を回復するために『朱子家礼』を部分的に直し、広く普及させることにも大きな貢献を果たした。彼の礼論は朝鮮で行われるすべての儀式の規範となり、その功績によって、孝宗八年（1657）に文元公という諡号が下贈され、肅宗四三年（1717）に文廟配享された。

## 14. 趙憲（1544～1592）

号は重峰。宣祖時の儒学者であり、一五九二年に朝鮮の役が勃発すると、義兵長としても活躍した。義兵活動を通じて、義理の精神を実践し、功績を立てた。これらの愛国の精神をたたえられ、仁祖二七年（1649）に文烈公という諡号を下賜され、高宗二十年（1883）に文廟配享された。

## 15. 金集（1574～1656）

儒教礼学の先駆者として知られる金長生の息子であり、号の慎独齋は論語の「君子は必ずその独を慎む（君子必慎其独也）」という句から取ったもので、個人の内面の道徳性を一瞬でも忘れてはいけないという意味である。父親の意を受け継いで、生活の中での儒教の礼を積極的に実践することを主張した。このように父と共に朝鮮儒教の真骨頂ともいえる礼学の基本枠組みを普遍化させた功績によって、孝宗十年（1659）に文敬公の諡号を下賜され、高宗二十年（1883）に文廟配享された。

## 16. 宋時烈（1607～1689）

朝鮮時代、仁祖、孝宗年間に活動した儒学者で、号は尤庵である。丙子の乱後に孝宗を支援し、清との和議を拒絶して北伐を主張し、和議派からは多くの弾劾を受けた。波乱万

丈の政治家としてのみならず、栗谷李珥の学説を受け継いだ儒学者として、戦乱の中で民のための政治を展開しなければならないと主張した。肅宗二一年（1695）、文正公という諡号が下賜され、英祖三二年（1756）に文廟配享された。

17. 宋浚吉（1606～1672）

号は同春堂。朝鮮礼学の大家である金長生と金集に性理学と礼学を伝授された。宋時烈と孝宗を助け北伐を画策し、弾劾を受け下野したこともある。文章にも優れており、「忠烈祠碑文」をはじめ、明倫堂の扁額の文字を書いた。彼は肅宗七年（1681）に至って文正公という諡号を受け、英祖三二年（1756）に文廟配享された。

18. 朴世采（1631～1695）：

朝鮮肅宗の時の儒学者で、号は玄石、南溪である。宋時烈らと親しく交流し、官職に就きながら党争の仲裁とその根絶のために力を尽くした。また朝鮮の儒教の歴史について特別な関心を持ち、新羅から高麗と朝鮮に至るまでの様々な儒学者たちの師弟関係と交流状況を記録した『東儒師友録』<sup>14</sup>を著し、学術的に大きく貢献した。肅宗二四年（1698）に文純公の諡号を下賜され、英祖40年（1764）に文廟配享された。

高麗時代の安珦の『朱子家礼』輸入、鄭夢周も『朱子家礼』に基づいた家廟制度導入によってまた朝鮮中期以降は様々な祠廟が出来た。また学問研究と先賢祭享のための私設教育機関である書院設立の最盛期を迎えた。<sup>15</sup>書院はたいてい十八賢のいずれかの人物を祀っている。またその多くは十六世紀に成立しており、この頃如何に儒学が盛んであったかを示している。さらに朝鮮の役を経て多くの文廟配享が行われたことから、戦乱で荒廃した国を立て直すのに、儒教の力がいかに大きかったかを物語っている。つまるところ高麗時代に本格的に導入されてきた科挙制度や朱子学が朝鮮中期に書院という形で花開き、その後に朝鮮の役を経たことで国の基幹を儒学（朱子学）でもって再建し、その過程で自国の賢人の文廟配享が形成されてきたといっても過言ではない。そしてその道学は科挙という学問レベルの次元にとどまらず、特に十七世紀以降の朝鮮後期に至っては、「『朱子家礼』の普遍化」という形になって、冠婚葬祭などの日常生活の規範としても深く浸透していくのである。



#### 4. おわりに

東国十八賢については、これまで日本においてその資料も含めて体系立てて紹介されてこなかった。しかし今回の内容で資料やその時代背景による人物像が分かったといえる。またそれらを表にまとめ、配享年代と共に、朝鮮中期以降に成立した書院との関連も記した。

これらの人物については、年代は違うものの皆朝鮮儒学の発展に寄与した人物である。特に光海君の時代には文廟をはじめ多くの建物が焼失して国が荒廃したこともあり、その荒廃を儒教によって正そうとしており、配享された人物をみても朱子学の朝鮮定着に寄与した人物である。そして主に『朱子家礼』の普遍化」という、日常の実践儒学に尽力した人物を選んでいるといえよう。これらの文廟配享は、国の基幹が儒学にあることと同時に、東方礼儀の国として道学の実践によって自らも聖人君子に到達できるという肯定的なとらえ方が示されており、朝鮮を中国同様に文化的国家であるとする当時の為政者の自負心が窺がえるところである。

#### 注

- 1 孔門十哲とは孔子の門人で、徳行、言語、政事、文学に優れた十人をさす。『論語』先進篇の「孔子門徒三千。而唯有此以下十人名為四科。四科者徳行也。言語也。政事也。文学也」に拠る。徳行には顔子、閔子騫、冉伯牛、仲弓。言語には宰我、子貢。政事には冉有、季路。文学には子游、子夏が該当する。これらは時代によって多少の変化があった。たとえば、十哲の一人かつ四大聖賢の顔子の代わりに、子張（顓孫師）が加わり、後には有若と朱子が加えられ十二哲とされたこともある。また朝鮮で配享される賢人として宋朝六賢があり、次のようになっている。邵雍（1011～1077）、周敦頤（1017～1073）、張載（1020～1077）、程顥（1032～1085）、程頤（1033～1107）、朱熹（1130～1200）。
- 2 寺田剛「韓国の孔子廟について」（『アジア研究所紀要』十三号、亜細亜大学アジア研究所、一九八六）。
- 3 成均館編『成均館略史』成均館、一九七二年、一九八二年別編。氏の見学した朝鮮文廟は「一九四九年に、全国儒林大会の決定を経て、東方十八賢を大成殿に従享し、十哲宋六賢の後方に東西に分けて祀った」ものとある。
- 4 『東国文献』巻四の「文廟配享篇」に、孔子から東国十八賢の宋浚吉までの文廟に祀られた人物が著されている。
- 5 姜敦錫『典故大方』（明文堂、影印本、一九八二）。巻一は歴代篇、殿宮園墓、万姓始

祖篇、卷二は相臣、文衡、湖堂、清白吏、功臣、名将、登壇、文武制閫録、卷三は経筵官抄選録、儒賢淵源図、門人録、文章家、書画、卷四は、宗廟配享録、文廟配享録、書院享祀録、杜門洞七十二人、四色党派原因略説、北関七義士、十二士禍録、壬辰乱殉節諸人、起義僧兵将、義妓、義兵将、殉節臣、斥和臣、江都殉節婦女、陪従八壮士、壬午遇害人、甲申被禍六大臣、東援録、通信使、外国人来貢、外国人来仕、明人帰化などで構成される。

- 6 小田省吾・魚允迪合著『朝鮮文廟及陸廡儒賢』（朝鮮史学会、一九二四）。篠田治策編『朝鮮文廟及陸廡儒賢・辛未洪景来乱の研究・徳壽宮史』（韓国併合史研究資料八六、龍溪書舎、二〇一一年一月復刻版）。
- 7 『道学淵源録』二卷二冊。中国と朝鮮の道学の淵源や賢人について、孔子を筆頭に四聖、十哲、宋朝六賢、東国十八賢の事績を記した総覧である。中国に関する記述が大半だが、朝鮮に関しては『三国史記』『高麗史』『麗史提綱』などの関連内容、墓誌銘などの資料も収録した。韓国国立中央図書館蔵。木活字本で表紙、内容ともに『道学淵源録』であるが、書誌名は『道德淵源録』となっている。以下、『道学淵源録』の内容と括弧内にページ数を示した。『道学淵源録』卷之一は、五聖事蹟（1）十哲事蹟（18）宋朝六賢事蹟（27）弘儒侯事蹟（58）文昌侯事蹟（59）晦軒安文成公傳（62）圃隱鄭先生神道碑銘（68）寒暄堂金先生神道碑銘（75）一蠹鄭先生神道碑銘（87）靜菴趙先生墓誌銘（94）贈領議政文元李公神道碑銘（107）河西金先生神道碑銘（120）退溪李先生墓碣銘（132）。卷之二は、栗答李先生墓誌銘（1）文簡公神道碑銘（30）牛溪成先生神道碑銘（40）重峰趙先生神道碑銘（41）墓表（42）沙溪金先生神道碑銘（44）慎独齋金先生神道碑銘（57）同春堂宋公墓誌（68）御製墓碑銘（91）尤菴宋先生墓表銘（93）南溪朴先生墓表（101）文廟配享篇（107）東国十八先正祠院録（113）。
- 8 『道学淵源録』五八頁。
- 9 内容に関しては、李会滄の『道学淵源録』（韓国国立中央図書館蔵、一九三四）をはじめ、寺田剛の「東国十八賢の略伝」（「韓国の孔子廟について」）、姜敦錫『典故大方』などを参考とした。
- 10 燕山君（1494～1506）代に最初に起こった勲旧派の士林派弾圧事件。勲旧派とは旧貴族勢力をさし、士林派とは科挙登用によって台頭した新興士大夫層をさす。
- 11 燕山君が、生母が廢妃になり殺害されたことを知り、その折の臣下たちが肅清された事件。
- 12 一一八七年、朱熹が鄭子澄に編纂させた儒教の入門書である。
- 13 ソウル、南西地域を中心とする学派。李珥は、その代表人物である。李滉を中心とす

る学派を嶺南学派といい双璧をなした。

- 14 朴世采『東儒師友録』三七卷十九冊。一六八二年成立。十八賢の一人である朴世采が新羅の薛聰から朝鮮の成渾とその門人まで儒学者たちの師友の淵源を明らかにした。性理学以前の儒学者である強首・金富軾が除外され、申叔舟、梁誠之、李舜臣、郭再祐など一般的な儒学者たちが抜けていることから、朝鮮道学を中心に歴史的流れが記述されている。蔵書閣所蔵本。
- 15 祠廟に関しては、王の祖先を祀る宗廟をはじめ新羅時代には唐の九廟制と似た七廟制があったとされる。偉人を祀るのが一般的であり金庾信の花郎廟などがその例である。韓国中央研究所『韓国民族文化大百科事典』デジタル版「祠宇」の項目参照。

### 参考文献

- 朴世采『東儒師友録』（『東儒師友録（韓国教会史研究資料第六輯）』弗咸文化社、一九七七。
- 李成茂『韓国の科挙制度』韓国学術情報、二〇〇四。
- 韓国中央研究所『韓国民族文化大百科事典』デジタル版。
- 儒教大事典編纂委員会『儒教大事典』成均館、二〇〇七。
- 孔祥林 等著『世界孔子廟研究（上）』中央編訳出版社、二〇一一。
- 孔祥林 等著『世界孔子廟研究（下）』中央編訳出版社、二〇一一。
- 盧鳴東「文化接受者の身份認同：朝鮮王朝文廟從祀的形成過程」『嶺南学報』第三輯、二〇一五。